

つづら職人

岩井良一

日本橋人形町「甘酒横丁」の一角に今なお息づく、つづら作りの伝統。忙しい父を支える為、三二歳で家業に入り、四〇年以上、つづらが未来に残ることを願い、日々手を動かし続ける。



いわいりょういち ●
1949年生まれ。江戸末期創業の「岩井つづら店」4代目。
東京都中央区日本橋人形町 2-10-1



店に届いた木地。ここからつづらに仕立てていく

「求める人がいる限り、辞めない」 つづら作りに込めた想い

上/和紙を隙間なく貼っていく
下/こちらは竹ぐしで和紙と木地を馴染ませる作業。竹の凹凸に和紙が入り込み、完全に一体となる



失われゆく職人技と暮らしの道具を守る

童話『舌切り雀』にも登場するつづらは、元禄期(一六八八〜一七〇四)に神田の職人によって生み出されたといわれ、江戸時代には婚礼道具として庶民にも親しまれた。和紙と竹から作られるため、軽くて丈夫。さらに通気性が良く、虫やカビも防いでくれる優れもので、かつては主に着物の保管用として一家に一つはある家財道具であった。一時期は関東地方だけで二五〇軒のつづら屋があったというが、今では全国に四軒、関東地方には二軒ほど。その数少ない伝統を守り続けているのが、岩井良一さんだ。

関東地方では古くから分業でつづら作りが行われ、木地(竹の骨組

み)を作る職人と、岩井さんのように、木地からつづらを仕立てる職人とに分かれていた。木地を隙間なく覆う和紙は、耐久性の高さで知られる埼玉県・小川町の手漉き和紙。刷毛で和紙に薄く糊を乗せ、二枚を貼り合わせる。およそ三〇秒で一組、ごくたやすく行っているように見えるが、貼り合わされた和紙にはミリの誤差も見えない。これを四つ切りにし、傷みやすい縁に巻いて補強する。「和紙を二枚貼り合わせて使うのは父が考えたやり方です。仕事に関しては必要な事しか話さない父でしたが、今ではそれも理に適っていると思います。仕事の勘や要領は、結局自分の身体で覚えるしかありませんから」

店内に刷毛が奏でるリズムミカルな音が響く。和紙と木地の間の空気を押し出すように擦って密着させ、さらに竹ぐしでその上から擦ることで和紙と木地を馴染ませる。漆塗りを行う前の下地として布糊(ふのり)を塗るのは、和紙に漆が染み込み、漆の光沢が鈍ることを防ぐ為のひと手間だ。その後、浸水やカビを防ぐ柿渋を二度塗り、カシュー漆を重ねていく。仕上げに内側に化粧紙を貼って、ようやく完成となる。つづら作りは糊や漆が乾くの待つのも仕事のうち。その間に別のつづらの工程を進められるよう算段するのも重要となる。一般的な二尺六寸(約七八センチ角)のつづらであれば、作れるのは五日間で四〜五個ほど。現在は最短でも約二カ月待ちだという。



近年は小ぶりな「30cm 文庫」も人気を集めているという。色は、黒、朱色、茶色の3種類がある

岩井さんの元にはつづら作りを教えてほしいと飛び込みで訪ねてくる人もいるという。その内の一人は、職人として独立し、茨城県で職人として歩み続けている。「つづらって材料は紙と竹ですが、丈夫なんです。私が結婚した際に父から贈られたつづらは、もう半世紀も使えていますから。近年は家紋と名前を入れて贈り物にされる方も多く、これから先も人から求められる以上はこの仕事を続けていきたいと思えます」